

第一章 個人と宇宙との關係

第一章 個人と宇宙との関係

古代ギリシヤ文明は、都市の城壁のなかで
育つて来た。実際、近代文明は全て、煉瓦と
漆喰とで出来た搖籃を持つてゐる。

此等城壁は、人間の精神にその痕跡をば深
く留めておいて、我々の精神の見晴しをなかに
、一分割支配し、の原理を樹立したのである。
こゝは、征服地に城壁を築き、要塞を設け、

征服地同志令立對抗せしむることによつて、
征服地を確保する習慣を我々の精神に生ぜし
むる。我々は、吾と吾、知識と知識、人と人との
自然とを分離する。こゝは、我々に、自ら築

いた障壁の彼方に在るものは何に對していも
強懷疑いりさ掛けしめるのである。こゝは、
凡ゆるものには、我々に認めらるる爲には、懸
命に奮闘せねばならぬのである。

第一次アリアン族侵入者が印度に現はれ
時、印度は広大な森林地であつた。その新参

者は急速にその小を利用した。此等。森林は、
 彼等に、太陽の猛烈な暑さや、熱帯の暴風雨
 の被害を避けしむる場を提供し、又、家畜の
 牧場、生贖の火の燃料、並びに小屋建てる材
 料を提供した。族長を戴いて、採りをやりア
 ンの氏族が方々の森林地帯に定住した。そこ
 は、自然の保護の利があり、食物や水が多量
 にあった。

かくて、印度では、文明は森林に生誕し、
 そして、この起源と環境との故に、独特の性
 格を帯びたのである。印度文明は、自然の広
 大な生命によつて取圍まれ、養はれ、又、着
 衣せられ、そのびがある。そして、移り変わる自然
 の採相と最も密接な、最も恒久的な交流をし
 たのである。

かくる生活は、生活標準を低下することには
 よつて、人々の智慧を鈍くし、且つ、進歩へ
 の刺戟を弱める傾きがある。考へらるるから
 知れたい。然し、古代印度に於ては、森林生
 活の事情は、人々の精神を鈍らせなかった。

、又、人々の活力を弱くし、唯、精神に
 特殊の方向を与へたのみならず、
 るのびある。自然の生長物と絶え
 おたのび、印度人の頭は、自命の
 りに境壁を築いて行つては、自命
 げる致望に煩はすか、
 人の目的は、獲得するに
 りと了解するに、即ち、環境と
 、生長して環境の一部となり、
 自命の意識を拓けること
 、真理とは凡そを包含する
 、存在には絶対的孤立は無く、
 唯一の道は、自己の本領を凡そ
 せしむるに在ると思つた。人々の
 宇宙の精神と、その大なる調和を
 とが、古代印度の森林に栖める
 った。
 後世に於て、此等の原生林は耕
 畑に道を譲る時が来た。高有を
 が、あちこちに発生した。世界の

と支隊のあつた強力を王子が建設せしむ。然
 し、その物質的繁栄の全盛時代と雖も、印度
 の精神は、常に、根氣のいゝ、自我実現の初期
 の理想、及び森の隠者の草庵の簡易生活の感
 服を顧みて讃嘆し、そして、隠者の草庵に貯
 へられし智慧から、最も良ハ靈感を得たので
 ある。
 西洋は、自然を制しつゝあると考へて誇つ
 てゐるが、自ら見乏する。恰も、自分欲する一々
 の物を、非好意的で、無縁を不物の配列から
 奪取せしめらるゝ敵對的世界に倣はせらるゝか
 の如くである。この感情は、都市城壁的習慣
 と、精神の都市城壁的鍛錬との矛盾である。
 都市生活では、人は精神の眼を集中した光
 芒、自分自身。生活と、自分自身の作物とに
 自分から向け、そして、そして、そして、
 胸に人の子を抱かぬ、いゝくしまつてゐる天
 不物と人の子自身との間に人為的な分離を生
 しめるからである。
 然し、印度には、見地が異つてゐる。

子或物と為做すのである。今一つの見地は、
 道を我々の目的地へ我々を連れ行くものと
 為做すものである。そして、その云ふものと
 し、見れば、道は目的地の一部である。それ
 は、既に、我々の到達の戸一歩である。それ
 は、道の上を旅するに依つてのみ、我々
 は、道がそれだけ我々に提供するものを獲
 得するに如く来るのである。その後の見地
 は、自然に因する印度の見地である。印度は
 一、二偉大な事實は、我々が自然を調和して
 来る新以は、人々の思想が事物を調和して
 来るからであり、人々が命令の目的のため
 自然の力を使用し得るは、人々の力が宇宙
 的なる調和して来るからであり、そして、
 弦向、人々の目的は、自然界を一貫して働か
 せる目的に達して衝突しない云ふことと
 あり。西洋に於ては、自然は、専ら、無生物や獸
 類に屬するものである。自然は、専ら、無生物や獸

一、突然説明し難い途切れがある。云子の如く、
 一般の感情である。それには依り、万物の階
 程に於て低位の凡ゆる物は、單に自然に造ら
 れ、智的とか道德的とかで完全といふ極印
 を持つておる物は、何れも人性である。
 それには、了安、芽と花とを二一の別々の類に
 分け、其等の優美さを二一の異ならし
 ぬれば相反する本源の功に帰する如く、
 躊躇い無く、然し、印の精神は、決して些かの躊
 躇い無く、その自然の血族肉係、万物の

断絶せざる肉係を認め、
 万物が根本的に一であることは、印の人に
 とつて、單に、哲學的冥想のみである。
 この偉大なる調和と、感情や行爲に實現する
 こととが、印人の終生の目的である。冥想
 や勤行により、その生活を調節し、凡ゆる物
 は印人に於て、精神的意義を持つておる
 のが、云子風に急識と養成し、
 水、克、実、花は、印人に於ては、單
 に、利用される、後は打ち捨てられる物質的現

象ではなにか一左。其字は、丁、文、文響曲の定
 成に一々の調子か必要を如く、即美人にと一
 二は、完全の理想を到達する際に、一々必要
 なものがある。

此世の根本的事実(10)は、我々にとつて、水亭
 に重要を意味を持つておることを云ふことは即ち
 人は直感的に感じることである。即ち、我々の
 、此世の根本的事実に対しては敏感である。物
 ばならぬ、單に、科学的興味、若くは、物
 質的利慾に駆られおることはよつてのみである

、其鳴の精神に於て、散漫と平和との豊かさを
 感情を持つて此世の根本的事実を了解するこ
 とに依り、その水と意識的関係を確立せねばな
 らないことを云ふのである。

科学者は、或る見方では、此世は我々の感
 覚に對して映する如きものである。即ち、我々の
 とは、知一つおるし、土や水は、真に、土や水
 として我々に示す力の活動であること、
 し、それ、如何に部分的にしかる水を理解し得
 るいかを知らなくてはならない。同様に、重の眼を南に

て、その人は、土や水に就いての究極の真理は、
 歳月の暮か、御さ、且つ、土や水の外觀の
 も、これに我々が了解する力の暮かに實現する永
 久之の意思を了解するに、これを云ふに、これを知つ
 て、おる。この事は、科学が単なる知識に過ぎぬ
 如くに、單なる知識でなく、靈にまゝ靈の
 直感の暮の暮ある。この事は、知識が力と与へ
 て、是れは、如くに、我々にかたよへて、是れを
 び、歡喜と与へて、是れを。その歡喜は、血族
 關係に在るもの。結金の新産である。宇宙に
 就いて、科学が教ふる程の知識しか持たぬ
 人は、人が、靈の眼力で、自然現象の中に見
 出すもの。何であるか、了解しなむであらう。
 水は、單に、人が、四肢を清めるのみにあらず、
 人、人の心も、清める。これ、水、靈が、人、
 の靈に觸れるからである。土は、單に、人、
 の体を支へるのみにあらず、人、人の心も、
 了。これ、土、接觸は、物理的接觸以上のもの
 であり、土は、生ける存在であるからである。人、
 と宇宙との血族關係は、は、一つ、これ、了解せぬ

時には、人の子は、牢屋に籠り、壁が彼に敵対
 するに、こゝに在るのぢある。人の子が、凡ゆる事
 物に於て、永遠の靈に逢ふ時は、自我から
 取放さる。こゝに、その時に、人の子は、自分
 が生かされて来た世界の十分を意義を發見し、定
 金を處理を了解し、万物との調和を確立す。こ
 りから、こゝにある。即ち、此に於ては、人々は、肉體
 的に、精神的に、周圍の万物と密接を固
 定を保つて、ゆるゆると云ふ事、或は十分を急識して
 ゆるゆるに命ぜらる。朝日や流水や豊饒な土地
 への射しこぼは、此等のもの、その胸に抱へて、
 り神の意思の表現として、挨拶する。手に命を
 らる。こゝに、かくて、我々の日々の、
 引して、受ける文句は、印度の古聖典、
 摘要を考へらる。こゝに、
 トリである。その助けを藉りて我々は、世界
 と意識する。人の子の靈の根本的渾一を悟らん
 と努める。即ち、この一への永遠の靈によつ
 て、
 りのこゝにある。この一への永遠の靈の力は、土

、空、星王創造し、同時に、外界と絶え不繋
 が一と動さ且一存する意識の芝び、我々の精
 神王は照らすのである。

印度は、異なる事物の価値の相違を無視し
 て来たことを云ふが、印度は、それをする、それは人
 生を不可能にするものだと云ふことは知らず
 するが故に、莫大のぼやい。万物の階程に於
 る人間の優越と云ふ觀念は、未だ嘗つて、印
 度人の頭から去つたことはない。然し、印度
 人は、莫に、人間の優越の存する点に一つ
 は、印度人独自の觀念を持つてゐる。莫に、
 この優越の存する点には、獲得の力に在るの
 なくして、強合の力に在る。それ故に、印度は
 、その心が、狭い、必要に満ちた世界から出
 て来たこと、無限界に於る其位置を判断して了解し
 得人が左めに、何か特別の雄大、又は美が自
 然に在るが、巡禮の地と選んだ。これ、
 印度に於て、全人民が、嘗つては肉食してあ
 り、生命に對する淺小な同情の感情を養
 子のために、肉食を止められたが、以てあり、しかし

二、この事は、人類史上比ひる事柄のど
 ちある。物的並びに心的障礙に依つて、我々が自分
 を自然のつぎで收生命から無理やり切り離
 す時に、即ち我々が宇宙人びなくして単に人
 とする時に、我々は、自命を当惑せしめる問
 題を次々とこしらへる。そして、我々はその
 問題の解決の源を断つて、凡ゆる種類の人爲
 的方法を試みるが、その方法の一端は自ら無
 限の面倒と云ふ收穫を齎らすかの如く印度人
 は知つてゐる。人百が、天地万物に於る安息
 所を捨てる時、即ち、人百と云ふ一本綱を綱
 渡りする時、それは人百にとつて、踊りか墜
 落かを意味する。人百は一歩毎に平均を保つ
 ために一々の神経と筋肉とを絶えず緊張させ
 て置かねばならぬ。その人百は、神を責め、
 おこからに、疲労の含む々に、神を責め、
 しめ、物の金作の組織によつて不幸に取扱
 はれ、左と考へて、神かを誇り、満足とを感ず
 る。

然し、かゝることには永久に續く得ない。人
 間は自らの存在の全性を、即ち無限界に於
 ける人の位置を握らねばならない。如何に人
 間は懸命に努めやうとせよ、人は己水の輝の
 策の窩の中で、生命を養ふ塵を作り得ぬと
 云ふことは知らねばならない。何故か？ 人は
 、人間の霊的生命に糧を永久に供給するもの
 は、蜂窩壁の外に在るからである。人はか自
 ら王無限界の活力を附け、進化する接觸から
 遮り、精神の營養と治療とのために己水自身
 に殺る時、その時には、人は自らを駆つて
 狂氣にせしめ、自らを引裂いて断片にし、そ
 して自分自身の物質を食子のたもととせ
 知らねばならない。全体を云ふ背景を奪はれ
 ると、人は人の貪は、貪の一つの大口の特権を
 持つ。純朴を失ふて見苦しくなり、恥かしげにな
 る。人は人の富は最早や大度でなくなるといふ
 は、徒らに贅澤になる。人は人の食欲は、その
 目的の範囲を守つて生命に貢献しない。食欲
 はそれだけ目的となり、人は人の生命に火を

放ち、そして此の大火の物凄いの炎の中で提琴
 を奏でるのがある。(19) 我々が自己表現に際して
 人を牽く附けることとをいって、吃驚させ
 うと試みるのはこの時である。即ち、美術に
 於ては、斬新のみに得んと努め、古いが然し
 永久に新しい復理を見失ふ。文学に於ては、
 単純なるも偉人なる人々の全作の觀察を見失
 子のてある。その代りに人々が激しく強い人
 工的支りの眩走の中に示すハコあるのび、心
 理学的問題として見ざる。即ち、変態的なる
 が故に、強い慾望の権化として見ざる。人々の
 の意識が、人々の自我の最も近い所に限ら
 ルコある時には、人々の本質の深い方の根は、
 永久に根を張つて行く土壌を見出すことと必去
 来をい。人々の霊は、常に識飛に激する。そ
 して健全な力に代へるに、一しりの判断を以
 つて幸いして生きた行く。人々の精神の遠近
 法を失つて、その偉大さを大げに量り
 、無限界との重要な接合点によつて量らば、
 又、その活動と運動によつて批判し、完全な

に附隨する休息——あゝ星の燦らめく空の裡
 に在る落着き、即ち不物の絶えぬ動ける律動
 的踊りの裡の落着きによつて批判しなはのは
 この時である。

アリアン族による印度の第一次侵襲は、ヨ
 ーロッパの人民によるアメリカの侵襲と寸分違
 はぬ類似物である。彼等も亦、卒生林や土民
 との激しい争闘に直面した。然し、この人
 と人との争闘、人々と自然との争闘は最後
 迄續いた。彼等は決して折合はなかつた。印

度に於ては、未開人の住居であつた森林は、
 聖賢達の隠遁所となつたが、アメリカに於て
 は、此等自然の生ける大伽藍は、人々にとり
 印より深い意味を有しなかつた。其等は、
 富と力とを人に齎らし、且つ恐らく、時々
 人の美の享妻に資し、又、孤独の詩人に靈
 感を与へた。森林は、人の霊が宇宙の
 霊と交はる靈的調和の場として、人の心
 に神聖な冥想を獲得しなかつたのである。

私は、物事がさうでなくあるべきだつたと

一瞬時だも暗示したくはない。若し、丁史が
 凡ゆる場并び、全く同じ事を繰返すものであ
 るば、それは機会のお金の浪費であらう。異
 を小る土地に住せる人々が、その異を小る産
 物と人性の市場へ賣らすと云ふことは、靈界
 有無相通の靈の高貴にあって最も良いのこ
 である。その産物の各々が互ひに他を補ひ、又
 、必要なる産物である。私か云はんとするこ
 の凡そは、即ちはその丁史の初、即ちには大なる
 影響を与へた一組の、特別の組合せの事情
 に遭遇したと云ふことである。即ちは機会あ
 る毎に、思考し、思慮を廻らし、努力し、若
 し、万物の存在の奥底を探求し、丁史上全
 く異つた方向に発達した人々、確かに價値な
 りを得たりし或物を成し遂げたのである。人
 間は自己の完全な成長のためには、自己の複
 合的生命を構成する生ける要素の全てを必要
 とする。こゝ小食物が異を小る畑に耕作す小、
 異を小る出所から賣らす小ねばならぬ所以で
 ある。

文明とは一種の型である。^{各国民が}自らのために、
 その最上の理想に従つて男女を形造るのには
 殺すかおろす型があるのである。その諸制度、立
 法部、意識的、無意識的教へ、賞罰の標準等
 は凡そ、この目的に貢献する。西洋の近代文
 明は、その全努力を組織することによつて、
 肉体的能力、智的能力、意志的能力に於て、
 完全な人を作り出すと努めてゐる。そこ
 では、子家の莫大を精力は、人々がその四圍
 を支配する力を振上げることに費す小るのであ
 る。それとして、子民は自ら必し手をつけること
 の出来る凡そ、物に所有し、利用すべく、即ち
 、その征服の途上に於る凡ゆる障害物に打ち
 つゝ、凡ゆる能力を孩令し、訓練してゐるの
 である。彼等は、自然や他。人種と戦ふため
 に常に訓練し、軍備は、毎日驚くべきもの
 となりつゝある。彼等の機械、設備、組織は、
 驚くべき割合で増加しつゝある。これは、疑
 ひなく、素晴らしい功績であり、人々の我
 意を通すことの不思議な表現である。それは

何事の障碍も知らず、又その目的として、他の
凡この物に対する人自身の優越だけを持
つておるのがある。

印の古代文明は完全と云ふ独自の理想を
持ち、その理想に向つて努力を傾注した。そ
の目的は力を得ることではなかつた。だから
、それは力を獲得する能力を極度に迄養成す
ることと無視した。又、攻守の目的の爲に、
富の獲得の爲の協同の爲に、又、軍事的、政治
的優越の爲に、人自身を組織することと無視し

た。印が實現せんと試みたる理想は、最も優
小石人々冥想的な生活の孤独に連れ行つた。
そして、實在の不思議を徹底的に探究するこ
とによつて印度が人類の爲に得た寶は、俗世
間的成功の範囲内では、印度に多大の損害を
与へたのである。けれども、かやうなことは
、崇高な功績であつた。——それは、涯とし
て知らぬ人の憧れ、神の實現のみをその目
的とせる人々の憧れの最高の表現であつた。
印には、有徳者、賢者、勇者、政治家、

王、皇帝が居た。然し、印度は、此等の類に
 の中の誰かを仰ぶ見、人々の代表者たる孫に
 選んたか。

彼等は聖人⁽¹⁶⁾であつた。聖人とは何か。知識

識の方面で神々に到達したので、智慧に満ち

ておれた人達であり、又、自今の靈と一体にな

つておる最高の靈を見出したので、真我と完全

に調和しておれた人達であり、心の方面で神を

実現したので、利己的欲望に煩はれずかつ

た人達であり、そして、世の中の凡この活動

の方面では神を経験したので平和に到達して

おれた人達である。聖人とは、凡ゆる方面から

崇高な神に到達したので、永々の平和を見出

した人達、凡ゆるものと一緒にあつた人達、宇

宙の生活に入つた人達である。⁽¹⁷⁾

かく、万物と我々との関係を實現するこの

状態、即ち、神との結合によつて万物に入つ

て行くこの状態は、印度では、人類の究極の

目的であり、完成なりと考へらる。

人々の破壊するこども、掠奪するこども

は、破壊するこども、掠奪するこども

、金を儲けること、蓄積すること、発
 すること、発見すること、出来るか、人
 の偉大なる所以は、人の霊が、凡そを包含
 し得るからである。人の霊は無情な習慣と
 云ふ死せる殻の中に包まるとは、又、仕事
 盲目的狂乱が視界を遮り、渦巻く埃の
 嵐の如く、人をも抛つて廻すことは、人
 びに破壊である。こゝはまた、人の殺す
 包含の霊なる人の存在の霊との殺す
 のである。本来、人は自分自身の、又
 世の人の奴隷ではなく、自由なる、神の
 妻人である。人の自由と自己実現とは、完
 全なる包含の別名に違ふ。妻に存する。こ
 包含の力により、この人の存在を滲透せし
 めることににより、人は万物に滲透せる
 霊、
 |—こは、又人の霊の気にもある。霊と結合
 するののである。人は他の凡その人を押し
 たり、肘で突いたりして、自分自身を優越に
 高め、人と試み、場合には、即ち、他の凡
 人より上位する、と誇る。卓越を達せんと
 試

は、⁷神を見出さるる爲には凡そ抱擁せらるる
 この故に優波尼沙土の教への精神とす所
 物の狭い壁の中に閉込めらるるのである。
 とが表裏をなす。その人は己の限りある獲得
 の世界である。靈の世界の包含の門をくゞるこ
 人は自我を絶えず膨らませる爲に、完全を調和
 してゐる。富を蓄積することにかまけてゐる
 有物は我々を制限するものであることとを意味
 我々を他のものから分離すること、我々の所
 。この人は、自分の爲に貯へるものはない。
 針の孔を通る方^{カタ}反つて易し⁽²¹⁾。と云ふキリ又
 トの教への中にこれと同じ真理の片鱗がある
 こととである。
 富める者の神の心に入るより、駱駝の
 しこめる故に神と平和に調和してゐると云ふ
 け、この人々は、人と自然とに完全な調和
 する⁽²⁰⁾。人々となす所以はこゝに在る。その意味
 平和な人々となし⁽¹⁹⁾。又、神と一なるは
 波^バ尼^ニ沙^{シャ}土^トが⁽¹⁸⁾、人生の目的を到達した人々を
 みる場合には、神から遠ざかるのである。優^ウ

べからず。富を追求するに當り、小利を得ん
 とて汝は、まことに、凡てを捨つるも、それは
 完全なる神に到達する道には非ずと云ふこ
 とである。
 直接に、又は、間接に優波尼沙土ウパニソドに負ふ所
 ある改洲の幾人かの近代哲學者は、彼等が受
 けた恩義を了解する所か、印度の一切衆生の
 父婆羅吸摩ブラマは、單なる抽象的觀念に過ぶまい
 。世界に在る凡ての物の否定に過ぶまいと主
 張する。一言以て云へば、神は形而上学以外
 の何處にも見出し得ぬと主張する。かゝる教
 へは同心人の一部の人には普及しておろすも
 知れぬし、猶普及しておろすかも知れない。然
 し、これは印度の精神の一般傾向と一致しな
 い。さうである、印度の精神の傾向は、不
 物に、これは絶えず印度人に靈感を与へてお
 神の宿するにとま了解し、強調することの練
 習が一つである。
 我々はこの「世に在るもの」は依りて神に包ま
 れ、(25)と見る程に命ぜられ、おろす。

「吾小は火の中、水の中に居給ふ神、全世
 界に行き渡り居給ふ神、多年性の木々にも、
 年々の作物にも居給ふ神に繰返し々々挨拶
 す。 ⁽²⁶⁾
 この神が世界から引け放さる神たり得る
 や。まゝにびまゝて、こゝには不物の中に神を
 見ることのみならず、世界の凡ゆるもの申び
 神に挨拶することとを意味しこゝにみよ。優波尼沙^{ウパニサ}
 エド神を意識せる人々の宇宙に對する態度は
 、深い崇拜の感情の態度である。彼の崇拜の
 対象物は何處にぞある。崇拜することには凡
 々の実在物を單に、名のみ、外觀のみでなく
 、本當に存在せるものとす。一つの生じた眞
 理である。この眞理は、單に知識の眞理たる
 のみならず、崇拜の眞理である。「ナモトナ
 マフ ⁽²⁷⁾ | 我々には不物に現はれる靈に到る所
 で挨拶する。しるも、繰返し、繰返し挨拶す
 る。印を人に到る處に神に挨拶することには、
 聖人の叫びの中に認めらるる。その聖人は究
 然、歡喜極まつて、草木禽獸に呼び掛ける。

の本質に於て不物の光であり、生命である存
 在、世界を意識せる存在が婆羅摩である。
 (31) しと云ふ。不物を意識して、婆羅摩の精神に
 物に意識してあることか、婆羅摩の意識に浸
 みる。我々は、身心共に婆羅摩の意識に浸
 つてある。太陽が地球を引くのも、婆羅摩の
 の意識を通じてあり、光波が星から星へ伝
 へられるのもさうである。
 単に空に在るのみならず、この光や生
 命、この凡てを感ずるものは我々の霊の中に
 存在する。L (22) るものは空に於て、即ち、外延の
 世界に於て一切のものに意識し、しかも、霊
 に於て、即ち、内延の世界に於て一切のもの
 を意識してある。
 かくて、我々が宇宙意識を得んとすれば、
 我々は自分の感情を、この不物に滲透せる無
 限の感情と融合しなげればよい。実際、
 人間の唯一の眞の進歩は、この感情の範囲を
 拓めることと、一致する。我々の詩、哲学、科
 学、芸術、宗教の全ては、一層高い、一層広

一、範囲に、意識の領域を拡張するに貢献し
 一、ある。人としては、一層広い空る。右有によ
 一、又外的行動によつてむしろ状態を獲得
 する。むしろよくて、むしろ状態は人々が本意の
 人である範囲にしかたはなす。そして、人
 々の真実性は、人々の意識の広さで測らるる
 のである。然し乍ら、我々は代償を払つても、この意
 識の自由を獲得せねばならぬ。その代償とは
 何か。それは自己を放棄することである。我
 々の霊は、真に、唯、霊自身を否定すること
 によつてのみ自らを實現することか出来るの
 である。優波尼沙ウパニソドに曰く「汝捨つることには
 よつて得べし。汝貪むべからず。L(33)と。全
 ギータ(34)に、我々は結果に対する欲望の全
 てを捨て、無私無慾に働くべきことを教へ
 らる。これ多々の局外者は、この教へから
 次々如く断定を下して知る。即ち、「世界を
 所か望むるものを見る考へが、印度で説か
 る所謂無私無慾の根柢をなして知るのたしと

。然し、その途に真意のびある。

自己自身の強大を望む人は、自分以外の凡ゆるものを見縊むる。自分と比べれば、爾余

の世界は空^{クラ}なるものびある。かくて、不物の儼

存正存命に意識するためには、人は個人的

慾望の枷から釈放すべからざるなり。我々の

社会的義務を盡すためには、我々の同胞の重

荷を共にするためには、我々は此の訓練を経

ねばならざるなり。より広い生活に達せんとす

ゆる努力は、人に「捨てること」によつて得る

ことと、そして貪欲を捨てることとを要求する

。かくして、不物と人との一体の意識を漸

次拡張することは人々の為すべし努力である。

印度に於ける神は、一切の内容を欠く厚味の

なき氷実在物ではない。印度の聖人は「この

世に於て神を知ることは、本当の人間になる

こととあり、この世に於て神を知るは、これ

は死の荒涼である。然⁽³⁵⁾し、王強く主張し、

然らば如何にして神を知るか。「個々の事物及

び一切の物の中に神を悟ることは、によつて。

(36)

〇 學に自然に於てのみならず、家庭に於ても
 社會に於ても、一切のものの
 に於ける世界を認識せるもの
 の多ければ、我々への一つ
 の多ければ、我々への一つ
 である。神を悟り得ぬは我々
 への破壊に直面する
 〇 印象の詩人にして予言者たりし人々が、印
 度、空の降り注ぐ日迄の下に立ち、血後固縁
 王位はしくも認め、森羅万象に会釈した時
 心遣ふ道志にあつたと判然と了解することは
 〇 私を大なる歎びで満ちし、又、人々の將來
 にもかゝる時があるからと人々の將來に對
 しこの高い希望を私を満ちしめて置かる。こ
 森羅万象に挨拶するこゝは、それこそ人々の同
 い性質を有するものとして看做す幻覺ではな
 左。それには、奇怪にも誇張され、映像となつ
 て、到る處に映るものを見ることとて
 もなく、移らぬ光と影との自然の闘技場
 大規模に演ぜられる人類の芝居を目撃するこ
 ととて、かつかつ左。それこそ人々の個人を判
 限する障壁を越えて、人々の以上へのものとな

こと、万物と一になることとを意味した。それ
 は、学ぼう想像の働けでなく、自我の偽購
 と誇張との凡てから意識を解放することと
 一左。脈動し、無限の世界の形とあるのと
 じ力加、我々の内的存在に於ては、意識とし
 て現はれおるものと、及び渾一には何事間隙
 が無いと云ふこととを此等古の予言者は心の釋
 獲する深底に於て感じておた。此等予言者達
 にとつては、彼等が完全を明晰に直観するこ
 とに何事の互際もなかつた。彼等は、決して
 死自作と雖も、實在の領域に於る裂け目を造
 り出すものとは認めなかつた。彼等は云ふ「
 神の映像は不滅と其に死なり。」⁽³⁸⁾ 彼等は予
 言者達は、生と死との互に何事根本的対立あ
 りと認めなかつた。それとて絶対の確信して、
 「死は生なり。」⁽³⁸⁾ 云つた。死現の方面に
 於る生と死の互に於る生とに同じ静か
 を散らさす以て換移した。――「過ぶしもの
 生命の流水の裡に隠れおる。又將來生じ來
 るものも亦生命の流水の裡に隠れおる。」⁽³⁹⁾

彼等は、字を有る本理と消滅とを海の上の波の
 如く、表面に在るのみである如く、永久の生命
 は表徹も滅すも知らぬと云ふこととを知らずとも
 也。
 凡ゆるものほ不滅の生命から生じたもの
 であり、生命と其に波打つておる。生命は無
 辺を小はなり。⁽⁴⁰⁾
 意識の無上の自由と云ふ此の理は、こゝ
 我々によつて我々のものとし、要求せらるる
 待つておる祖先からの貴い遺産である。こゝ
 は、字に、哲學的、若くは詩的とか云ふのみ
 にはない。こゝは、道徳的基礎を持つておる
 優波尼沙土に、神は万物に行はれておる。
 こゝは、神は万物にある生得の善である。⁽⁴¹⁾
 こゝは、知識に於ても、愛に於ても、
 勤行に於ても、凡ゆる存在と愛に於ても、
 くして万物に弥漫せる神の中に人々の自我が
 包まらるる。こゝは、善の本
 質である。こゝは、生命は無辺である。⁽⁴²⁾
 と云

ㄥ

ふ
こ
と
が
、
優ウ皮ハ
尼ニ沙シ土ド
の
教
へ
の
主
旨
で
あ
る
。